絵画における線の表現性について

金田　晋

1、絵画の本質は、普通、色彩にあるとされ、線を色片の断片とみなしたり（アルンハイム）、また線の自律的価値を認めていても、これをデッサンに配分する（アラン）考えかたはよく見受けられる。だがこうした傾向は、中間色を描出する上で他の彩色法を圧倒した油彩画の隆盛発展に負うところが多い。事実絵画ジャンルの歴史を世界史的広袤において顧るとき、線に消極的価値をしか見出さない風潮は例外的な局地的、一時的現象にすぎないことがわかる。さらに線、かたちを色斑に解消したポワンティリズムのあとをうけた現代絵画の巨匠たち（ゴッホ、セザンヌ、クレー等）が追求した課題

は、絵画におけるかたちの復権、線が秘めている可能性の開拓であったといえよう。

2、線は事物の res extensa ではない。後者は事物の実体であって、見る者と関係なく、常に同一である。線、たとえば輪郭線は、それに対して見る者の視点、視距離、また視状況によってそれぞれ異ってくる。また線によって取囲まれる物が、それ自体では不連続であっても、なお連続した線において表示されうる。その意味で線は res cogitans に属しているように思われる。だが一方線はあくまで、物の線として現れてくる。かくして線は精神に内在するのではなく、精神との関わりにおいて現われる物の意味的現象である。線は物と精神との関係性において成立する。

3、もっとも原初的な線の現象形態は輪郭線である。幾何学において、輪郭線は単に図形をかたどるという一義的役割しか果さず、この図形の外側を捨象する。それに対して絵画における輪郭線は、その側方向に限定する空間と限定されることを截然と現出させる。また限定される空間が物に占められているがゆえに、見る者に不透明であるのに対し、限定する空間はそれ自身限定されておらず、見る者に開かれている。

4、だが見る者と見える物との関係は、無媒介的に成立するのではなく、両者を共属させる世界性に支えられている。それは画面空間において水平線と垂直線という構図的線において形像化される。水平線は永遠に見る者の位置と切結ぶことはなく、無限にひろがっている。それは見る者の介入を拒絶した物の秩序を表している。それに対して垂直線は、私のここから発せられる物への関係であり、有限である。後者の実存的ありかたのために、それによって表される奥行きには、精神性や価値が賦与されてくる(セザンヌ)。この両者は画面で直接描かれることは稀であるが、だがそれらを暗示する仕掛が常になされている。

5、輪郭線や構図的線の空間的性格に対して、直接時間的性格を表す運動線がある(カンディンスキー)。これは素面を切裂いてゆく緊張と筆勢の方向の二契機より成立っている。ここにおいて線は画家自身の手の動きと同化されるのであり、直接に画家の感動が転位されるが、前二者の線の有していた対立的関係は、その明確さを失ってゆく。